

図表 2-11 就業年数と仕事意識

	10 年まで	11 年以上	
魅力	230.25	200.14	*
悩み	207.25	233.68	*
単純作業	212.66	225.79	
社会的承認	206.99	234.05	*
仕事の安定	231.39	198.49	**

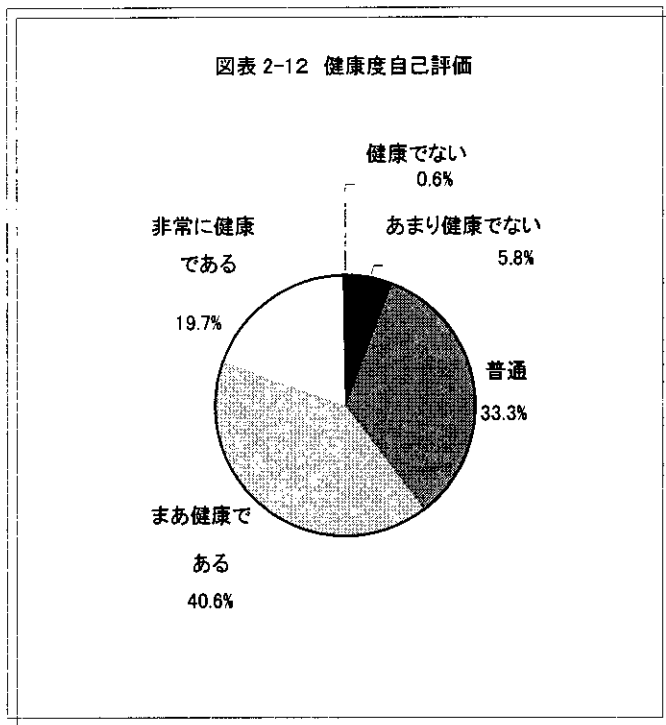
注) 表中の値は平均ランク

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

に得点が高かった。したがって、就業年数が 10 年までの職員の方が介護という仕事に対して、魅力と仕事の安定を感じる傾向があり、11 年以上の職員の方が悩みと社会的承認を感じている傾向がある。就業年数と仕事意識についてはこのような関連が指摘されるが、第 4 部で行われる更なる分析結果を踏まえて、結論を出したい。

(2) 職員の健康状態

職員の主観的健康度についての集計結果は、図表 2-12 に示したとおりであっ



た。

まあ健康であると回答したものが 40.6%と最も多く、普通 (33.3%)、非常に健康である (19.7%) がそれに次いでいた。

最後に、先に述べた介護という仕事に対する意識と健康との関連についてみておこう。各因子の因子得点と健康度との関連を、統計的に検定した結果を図表 2-13 に示した。

魅力の因子の因子得点については、全職員でみても就業年数で 2 群に分割してみても、

図表 2-13 仕事意識と健康

	健康		
	全体	10 年まで	11 年以上
魅力	.23 **	.19 **	.28 **
悩み	-.12 *	-.12	-.10
単純作業	.08	.05	.15 *
社会的承認	.01	-.03	.09
仕事の安定	.00	.09	-.18 *

注) 表中の値はスピアマンのロー

** $p < .01$, * $p < .05$

魅力を感じるものほど健康度が高いという有意な関連が見られた。悩みの因子については全職員で見ると、その得点が低いものほど健康度がよいという弱いながらも有意な関連が

見られたものの、就業年数を2群に分けて分析を行うとその関連は統計的に有意な水準に達しなかった。また、就業年数が11年以上のものについてのみ、健康度は単純作業の因子とは正の関連が、仕事の安定とは負の関連が、いずれも弱いながらもみられた。したがって、就業年数が比較的短い職員は介護という仕事に対して魅力を感じる傾向があり、魅力を感じているものほど健康度がよいという因果連関が予想される。

第3章 まとめ

第2部では、要重介護者の援助に直接携わっている職員を分析単位として、その処遇実態を描いてきた。第2部で明らかとなった知見は、以下の3点にまとめられる。

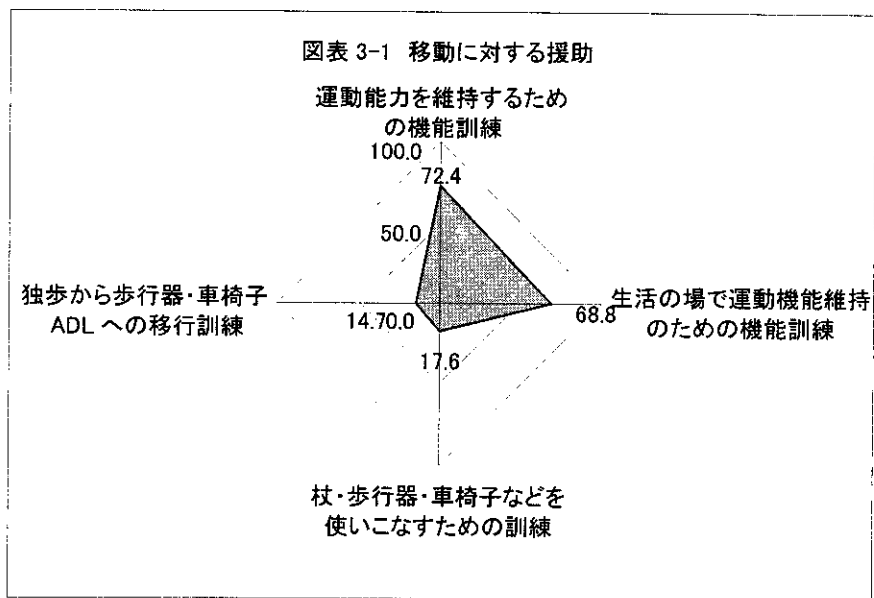
①職員の介護という仕事に対する意識は「魅力」「悩み」「単純作業」「社会的承認」「仕事の安定」という5つの因子によって構成されていた。単純作業の因子以外は就業年数と関連があり、②就業年数が10年までの職員の方が介護という仕事に対して、魅力と仕事の安定を感じる傾向があり、11年以上の職員の方が悩みと社会的承認を感じている傾向があった。また、介護という仕事に対する意識と主観的健康度との関連を分析した結果、③就業年数が比較的短い職員は介護という仕事に対して魅力を感じる傾向があり、魅力を感じているものほど健康度がよいという因果連関が予想された。

第3部 援助プログラムの実態

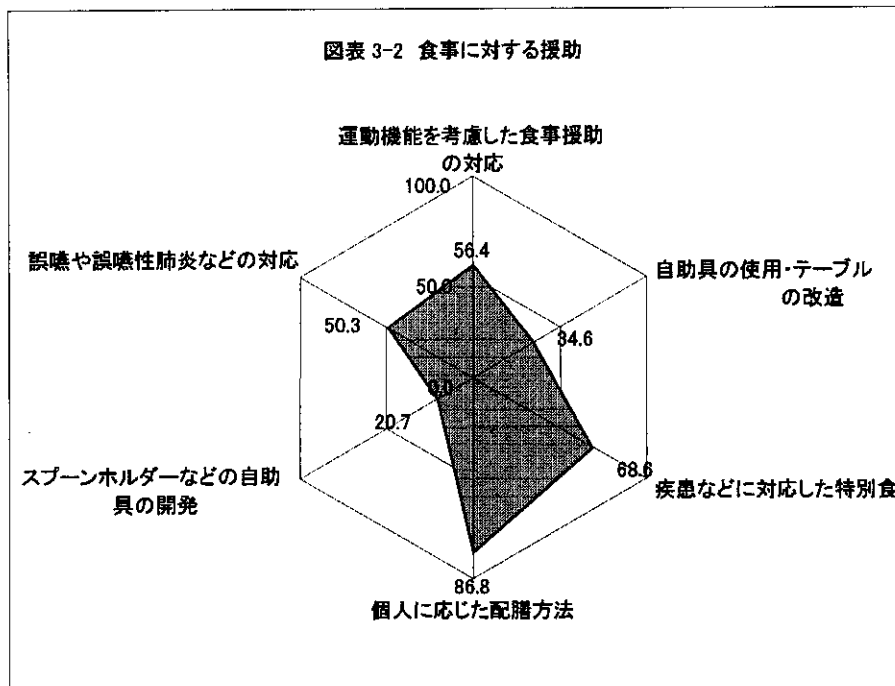
第1章 援助プログラムの実施状況

第3部では職員調査の466名のデータを用いて、要重介護者に対して行われている援助プログラムの実態について報告を行う。職員調査では、移動に対する援助、食事に対する援助、排泄に対する援助、入浴に対する援助、着脱衣に対する援助、移乗に対する援助、アメニティに配慮した援助、その他の援助という9領域に属する36項目の援助活動の実施の有無と自己評価を尋ねた。第1章ではその結果をまとめた。

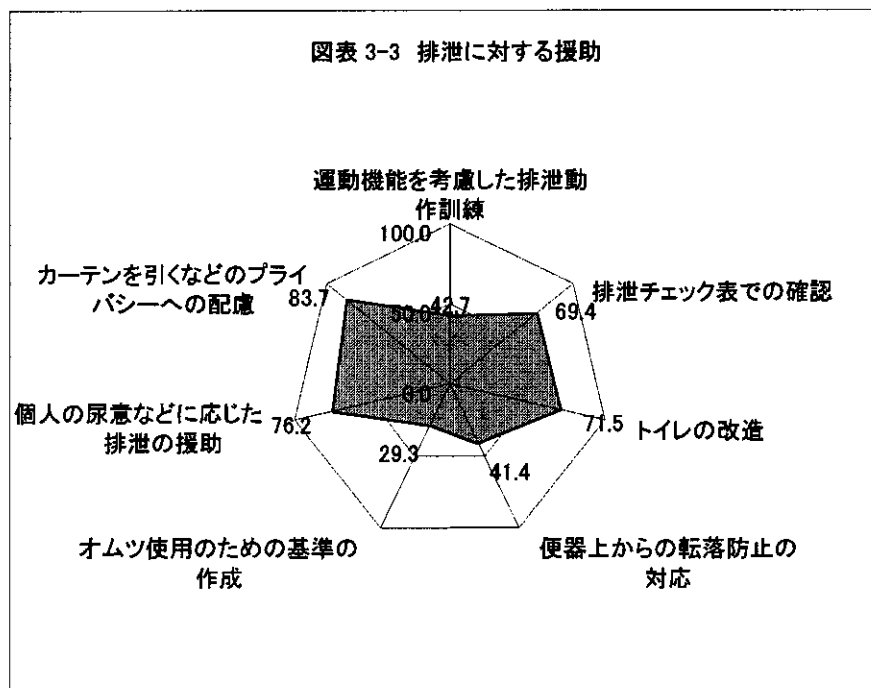
図表3-1は移動に対する援助の実施状況を示している。要重介護者の処遇に携わっている466名の職員の72.4%が運動能力を維持するための機能訓練を、60.8%が生活の場で運動機能維持のための機能訓練をそれぞれ実施している。



図表3-2は食事に対する援助の実施状況である。個人に応じた配膳方法および疾患などに対応した特別食の実施については、それぞれ86.8%、68.6%と高い割合を示していた。

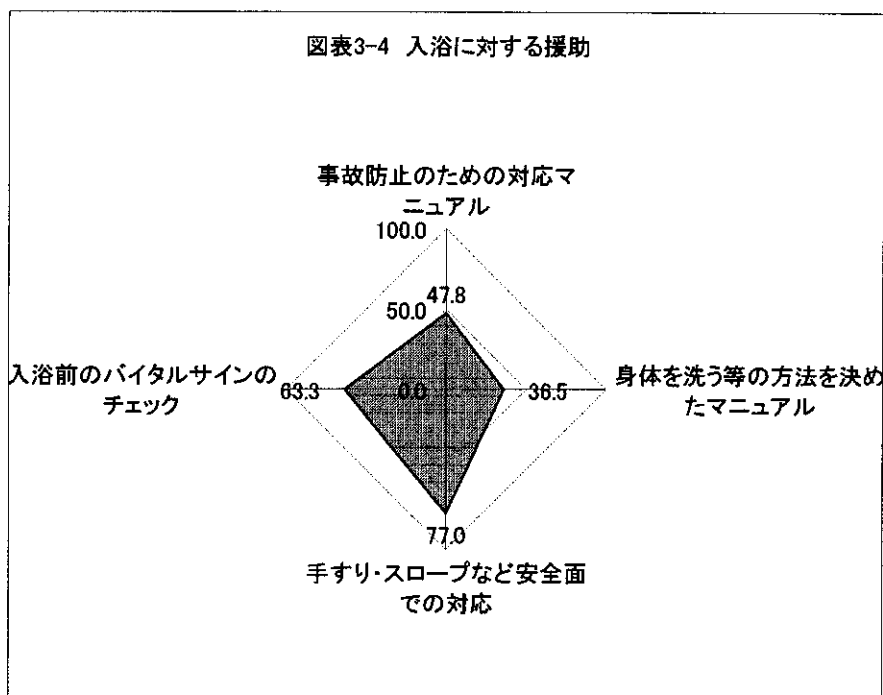


図表 3-3 は排泄に対する援助の実施状況である。

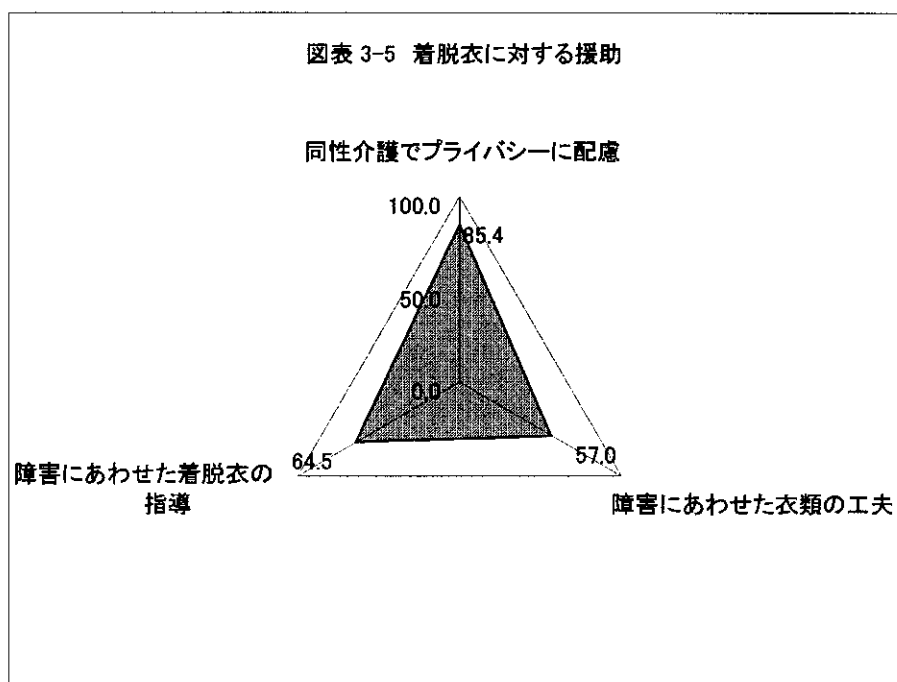


カーテンを引くなどのプライバシーへの配慮や個人の尿意に応じた排泄の援助などは、7～8割の職員によって実施されていた。

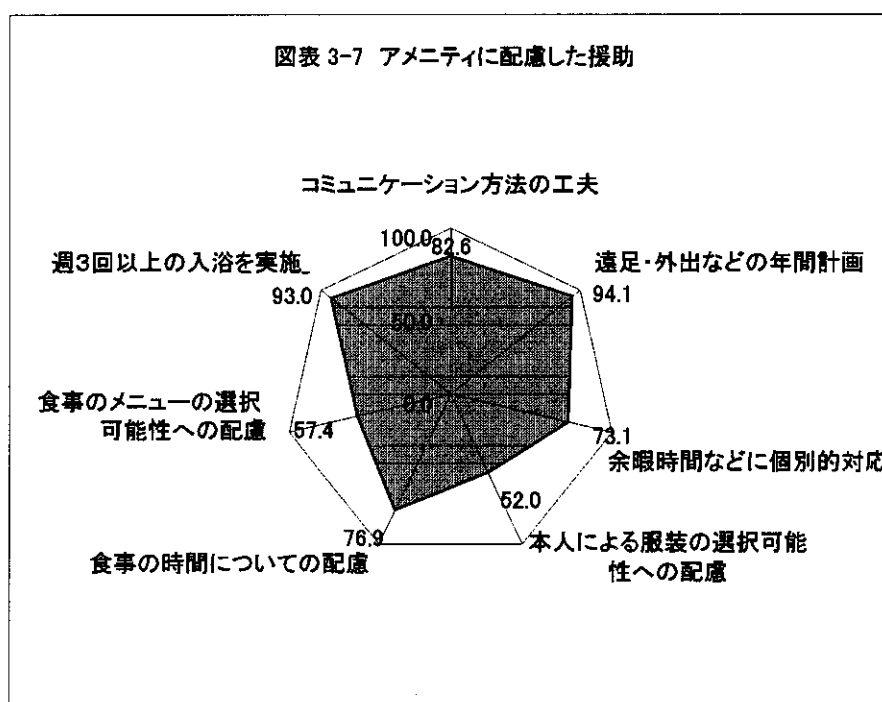
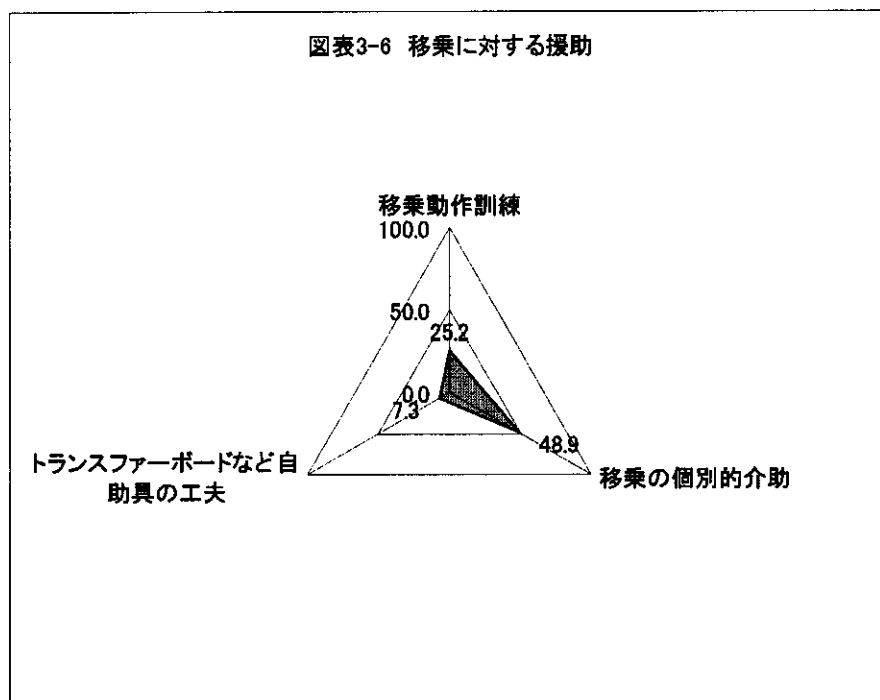
図表3-4は入浴に対する援助の実施状況である。各種マニュアルの作成は半分弱の職員によってしか実施されていなかった。



図表3-5は、着脱衣に対する援助の実施状況である。障害にあわせて援助が行われていることを示している。



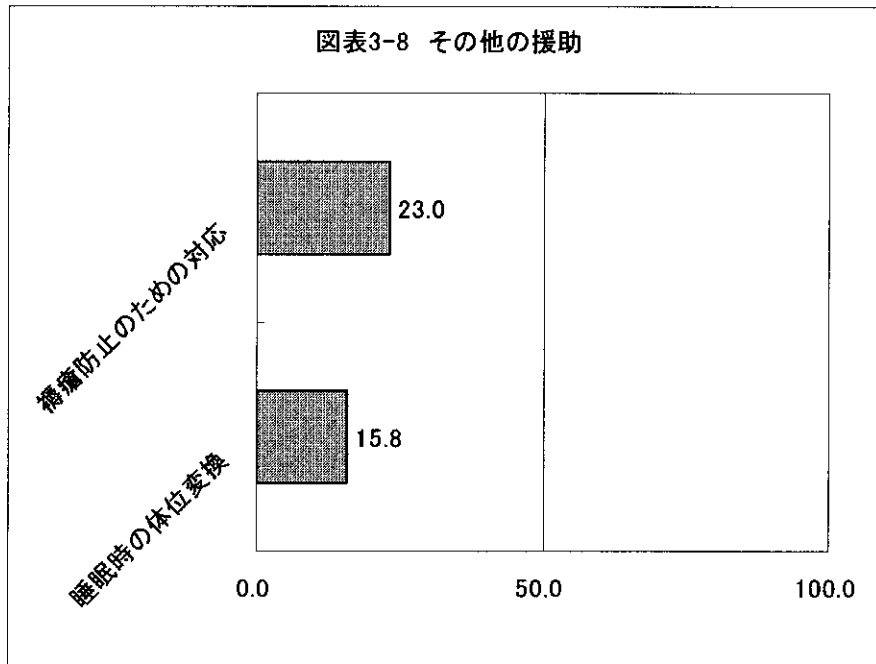
図表3-6は移乗に対する援助の実施状況である。他の援助項目に比べて、総じて実施職員の割合は低くなっていた。その必要性の少ない者が多いためとも考えられる。



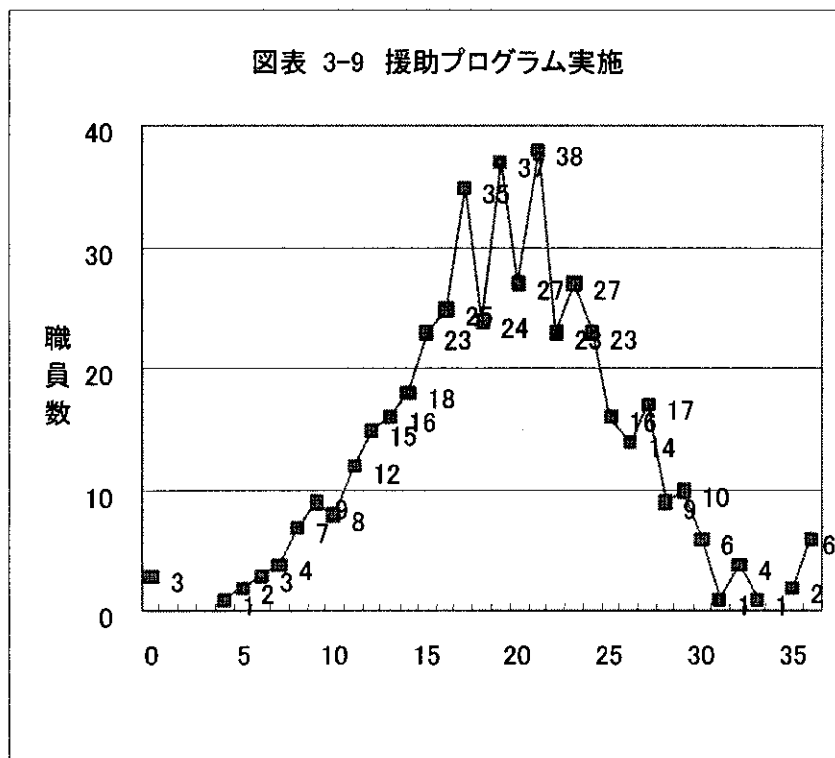
図表3-7は、アメニティに配慮した援助の実施状況を示している。昨今アメニティに対する配慮の必要性が叫ばれているが、現場の職員の過半数は既に実施している。

最後に図表3-8として、その他の援助の実施状況について示した。要重介護者として

歩行可能な者が多く挙げられていたことから、これらの項目の実施状況が低いことは当然の結果であろう。



これらの36項目について、ひとりの職員がどのくらいの項目数を実施しているのだろうか。各職員の実施項目数を集計した結果を図表3-9に示した。

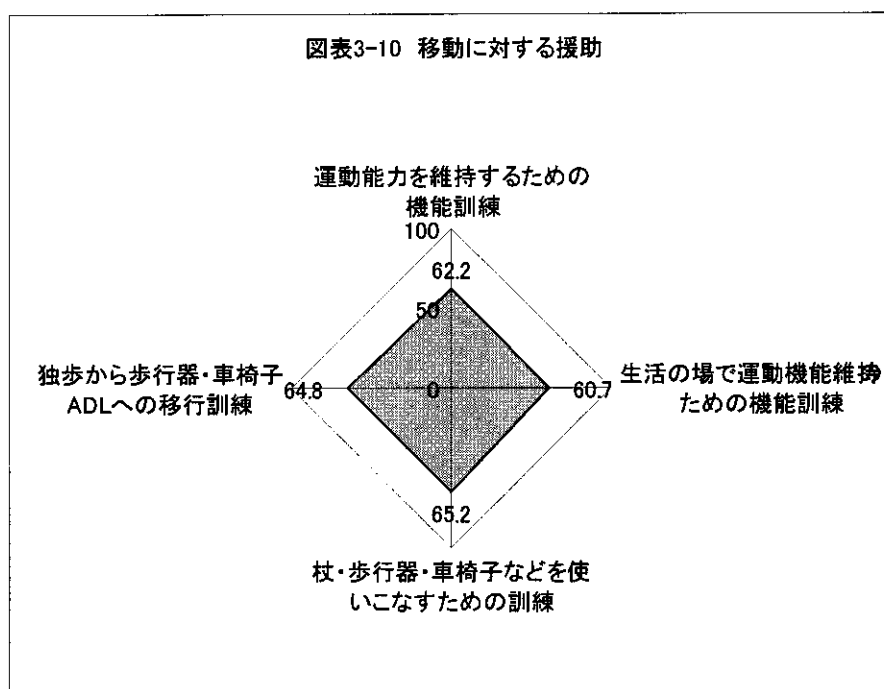


21項目実施している職員が38名(8.2%)、19項目実施している職員が37名(7.9%)17

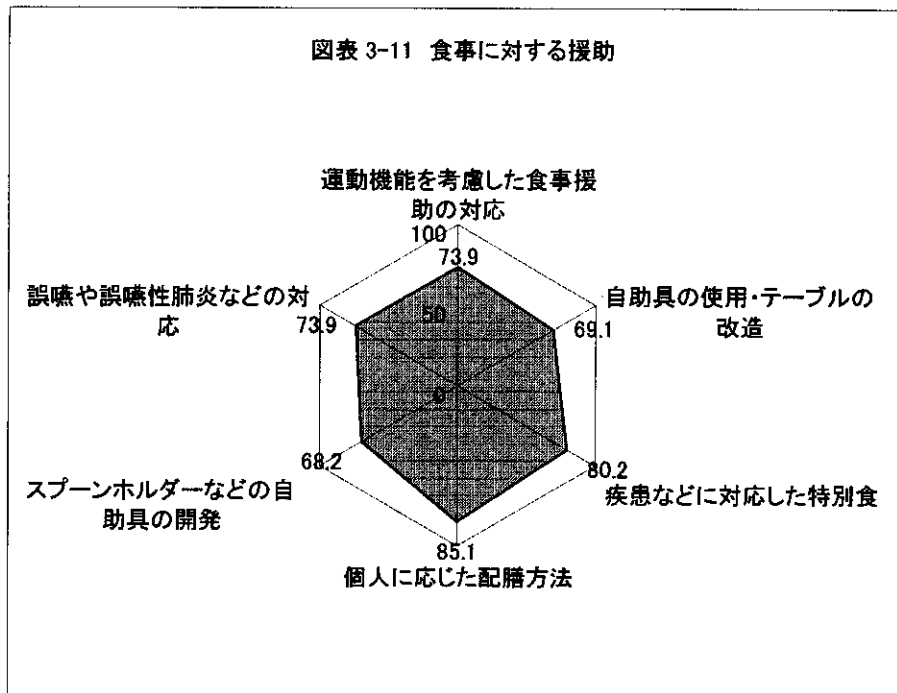
項目実施している職員が 35 名（7.5%）であった。

第2章 援助プログラムに対する自己評価

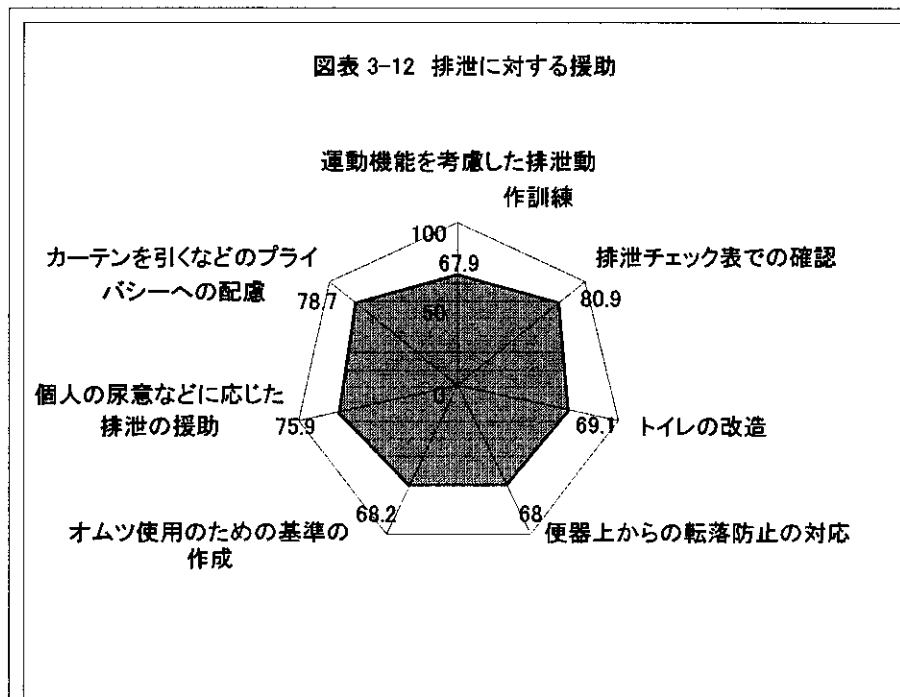
次に各援助項目に対する自己評価についてである。職員調査では 36 項目の援助活動のそれぞれについて「入所者に満足してもらっていると思う」か「入所者に満足してもらっていないとは思えない」のどちらかで回答を求めた。集計結果は以下のとおりであった。なお、値は「満足してもらっていると思う」職員の割合である。



図表 3 - 1 0 は移動に関する援助プログラムの自己評価である。各援助項目ともに 60 % 以上の職員が満足してもらっていると答えた。

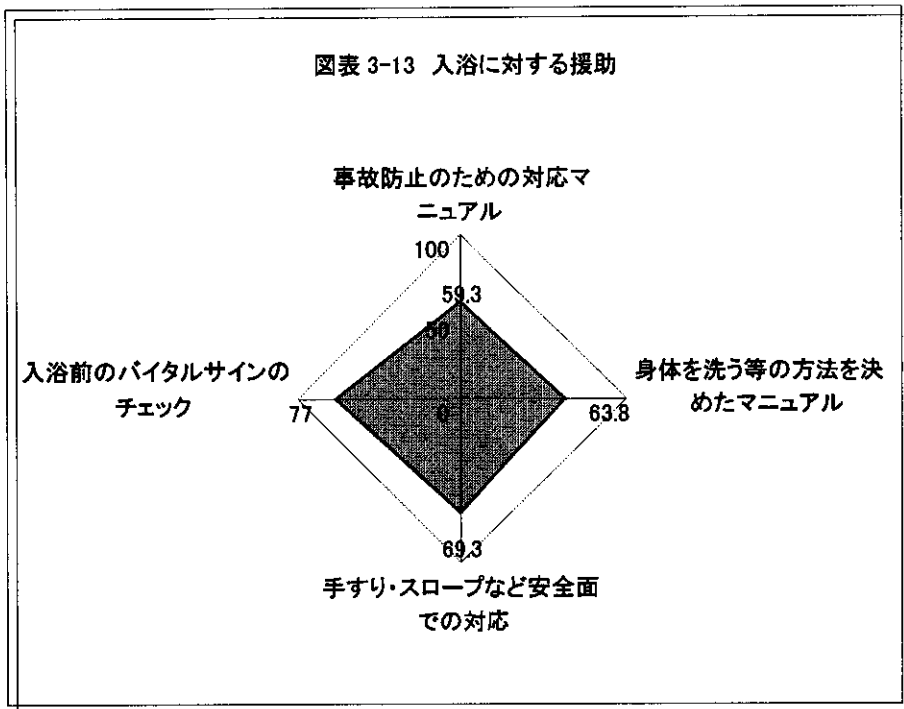


図表 3-11 は食事に対する援助である。食事に対する援助では、疾患などに対応した特別食と個人に応じた配膳方法では 80% 以上で自己評価が高かった。

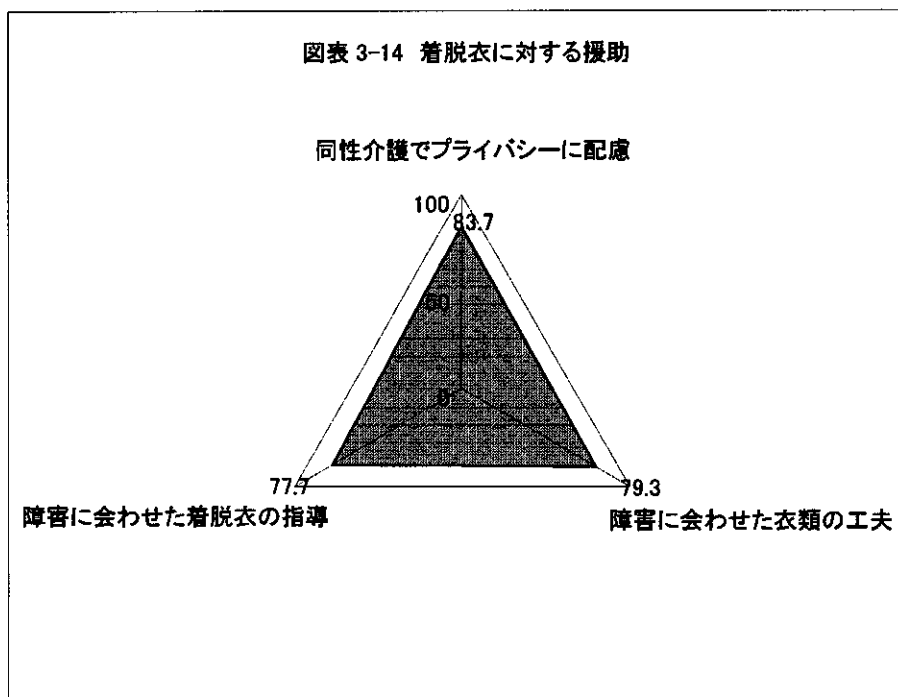


図表 3-12 は排泄に対する援助自己評価である。排泄チェック表での確認が 80.9%

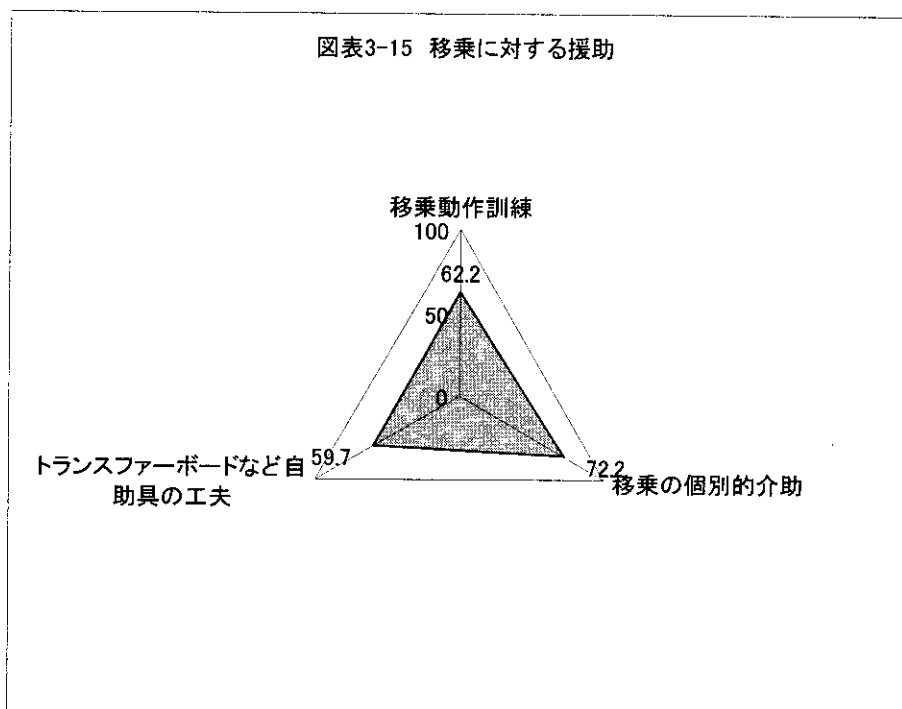
を示し、次いでプライバシーへの配慮が78.7%を示した。



図表3-13は入浴に対する援助に自己評価である。入浴前のバイタルサインのチェックで77.0%を示し、手すり・スロープなどの安全面での対応で69.3%を示した。

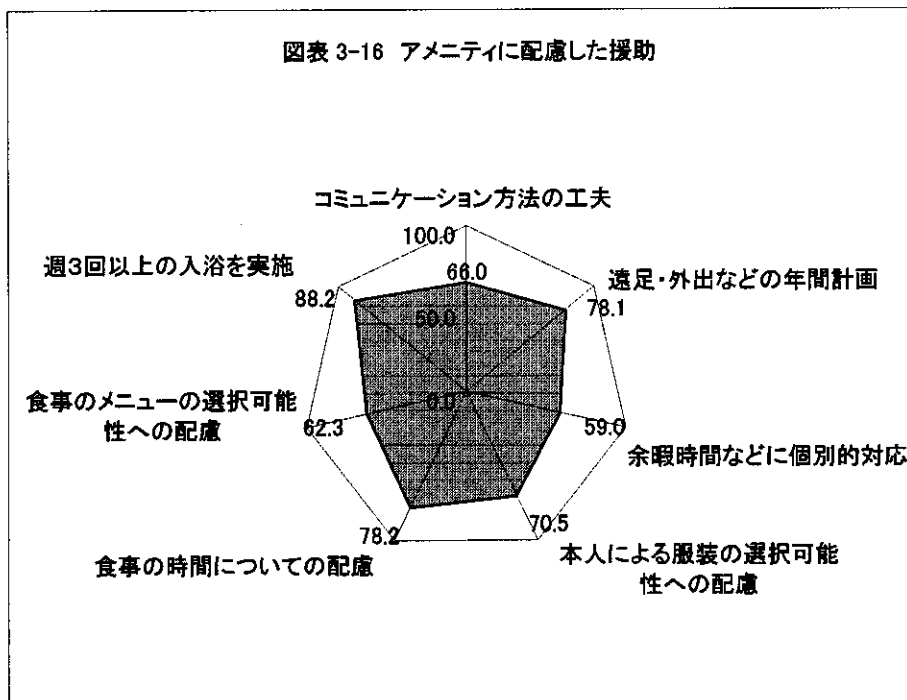


図表3-14は着脱衣に対する援助の自己評価であり、同性介護でプライバシーに配慮するが82.7%を示した。



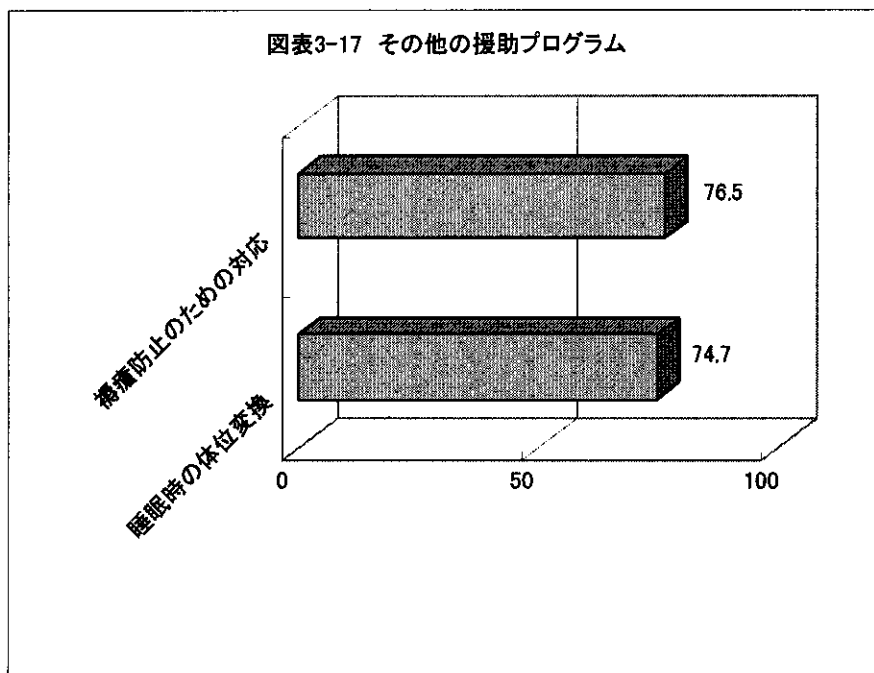
図表3-15は移乗に対する援助の自己評価である。移乗の個別的介助72.2%、トランスファーボードなどの自助具の工夫が58.7%を示した。

図表 3-16 アメニティに配慮した援助



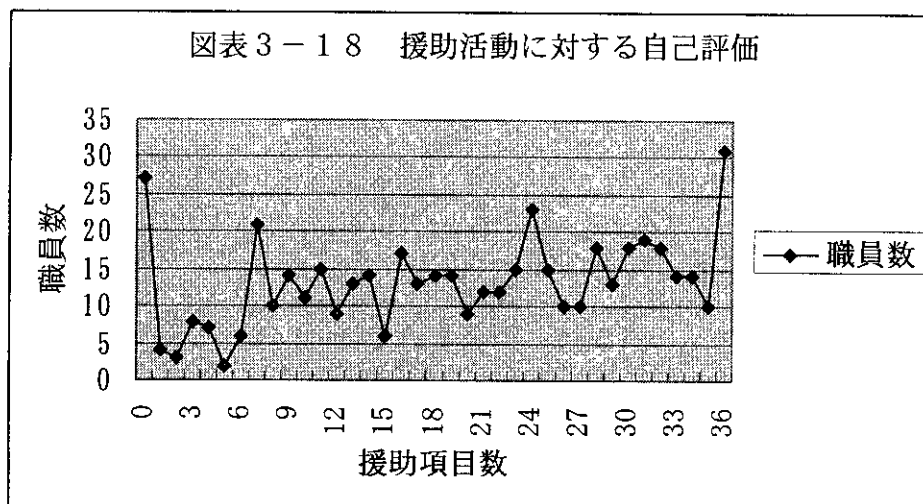
図表 3-16 はアメニティに配慮した援助では、週3回以上の入浴実施が88.2%、遠足・外出などの年間計画78.1%、食事時間についての配慮78.2%を示した。

図表3-17 その他の援助プログラム



図表 3-17 では、褥瘡予防のための対応と睡眠時の体位変換についての自己評価であるが、76.5%と74.7%を示した。

援助活動を満足してもらっていると自己評価した職員数を表したのが図表3-18である。



援助活動の自己評価で、36項目全てに満足してもらっていると回答したものが31名と最も多く、満足してもらっている項目数が0項目のものは、27名であった。満足してもらっていると回答した項目数が32項目から36項目の人数をみると87名であり、逆に満足している項目数が0項目から4項目までの人数をみると49名であった。

第3章 まとめ

第3部では援助プログラムの実態について素描した。ここでの主な知見は、以下のとおりである。

- ①研究では援助活動を36項目あげた。この援助項目の自己評価をみると、入所者に満足してしてもらっていると思っている職員の割合は、全の援助項目で50%を超えていた。
- ②満足してもらっていると回答した項目数が32項目から36項目の人数をみると87名であり、逆に満足している項目数が0項目から4項目までの人数をみると49名であった。

援助活動に対する自己評価はおおむね良好であった。

- ③利用者個人の障害の程度などの状況に応じた援助活動は、多くの職員によって為されていた。
- ④昨今アメニティに対する配慮の必要性が叫ばれているが、現場の職員の過半数は既に実施している。

第4部 調査結果のまとめ

重介護を要する知的障害者の実態を把握するために施設調査と職員調査の2種類の調査を実施した。以下に調査結果の要約を示した。

要重介護者の処遇実態について（施設調査）

- ① 多くの施設が、医師及び理学療法士をおいていなかった。
- ② 指導員および保育士数からみた施設規模が大きい施設ほど入所者数が多い。
- ③ 入所者数が多い施設ほど重介護を要する知的障害者が入所している施設の割合は高い。
- ④ 多くの施設（57%）が特別なプログラムを有していた。
- ⑤ ただし、施設規模が大きいほど要重介護者に対する特別なプログラムの保有率が高いとは言えない。
- ⑥ 施設規模が大きいほど重介護に対応した設備の不備が問題とならないとも言えない。
- ⑦ 処遇を行う上での問題点としては、施設規模が小さいほど職員数不足を問題として挙げる傾向がみられたものの、医療の必要性が高くなり退所した要重介護者がいたことは、施設で医療的対応ができていないという問題点の指摘へとは結びついていない。
- ⑧ 医療的対応については退所という事実と処遇上の問題点とは別次元として捉えられていることが示唆された。
- ⑨ 退所後の受け入れ先は、死亡退所110人、病院79人、特別養護老人ホーム49人、重症心身障害児施設43人等であった。

要重介護者の援助に実際に携わっている職員の処遇実態について（職員調査）

- ① 職員の介護という仕事に対する意識は「魅力」「悩み」「単純作業」「社会的承認」「仕事の安定」という5つの因子によって構成されていた。単純作業の因子以外は就業年数と関連があった。
- ② 就業年数が10年までの職員の方が介護という仕事に対して、魅力と仕事の安定を感じる傾向があり、11年以上の職員の方が苦悩と社会的承認を感じている傾向があった。
- ③ 介護という仕事に対する意識と主観的健康度との関連を分析した結果、就業年数が比較的短い職員は介護という仕事に対して魅力を感じる傾向があり、魅力を感じているものほど健康度がよいという因果連関が予想された。

援助プログラムの実態について

- ① 研究では援助活動を36項目あげた。この援助項目の自己評価をみると、入所者に満足してもらっていると思っている職員の割合は、全の援助項目で50%を超えていた。
- ② 満足してもらっていると回答した項目数が32項目から36項目の人数をみると87名であり、逆に満足している項目数が0項目から4項目までの人数をみると49名であった。

援助活動に対する自己評価はおおむね良好であった。

- ③ 利用者個人の障害の程度などの状況に応じた援助活動は、多くの職員によって為されていた。
- ④ 昨今アメニティに対する配慮の必要性が叫ばれているが、現場の職員の過半数は既に実施している。

付 調査票

整理番号	
------	--

重介護を要する知的障害者の援助のあり方に関する研究

処遇実態調査 調査票

1999年12月 1日
厚生省厚生科学研究
心身障害者福祉協会
(国立コロニーのぞみの園)

〔ご記入にあたってのお願い〕

1. 調査票には必ず施設長またはそれに準じる方が、ご回答・ご記入ください。
2. 回答は、指示に従ってあてはまる番号に○印をつけるか、数値・文字をご記入ください。
3. ご記入は、黒または青の筆記用具でお願いいたします。
4. この調査票は、12月10日までにご記入の上、同封の封筒に入れてご返送くださいますようお願いいたします。
5. 調査につきまして、疑問の点などがございましたら、ご遠慮なくお問い合わせください。お問い合わせは下記までお願いいたします。

〒370-0865 群馬県高崎市寺尾町2120-2

国立コロニーのぞみの園 企画調査部

TEL 027-320-1321 ファックス 027-327-7628